特集 「健康」が時代をつくる

取材・清水　高
山田清志
関根利子

現在、全国で「健康」の2文字をテーマにした新商品、サービスの創出が盛んだ。少子高齢化、長寿社会が進む昨今、健康産業の発展は、わが国の医療・介護関連予算の抑制につながるだけでなく、需要の拡大や雇用創出効果も期待できる。そして何よりも、われわれ一人ひとりが人生をもっと楽しむための一助とも成り得る。今号はその取り組みを拾ってみた。

地域資源の「馬」で人もまちも活性化

特定非営利活動法人　驥北会

青森・十和田市

動物と触れ合うと心身が癒やされていくのを感じる人は多いだろう。実際、動物との触れ合いには痛みや苦しみ、落ち込みを緩和する効果があり、治療の一環として活用する動きが世界的に広がっている。通常は犬や猫などの小動物を用いるが、驥北会は地域資源である馬に着目し、新たなビジネスの創出に取り組んでいる。馬が人間に与える効果を日本で初めて科学的に検証し、それに基づいて開発・実践している健康乗馬プログラムを紹介する。

障害を持つ人たちに乗馬で生きる希望を

秀峰・八甲田のすそ野に開けた十和田市は、十和田湖や奥入瀬渓流などを擁する自然豊かなまち。古くから良馬で名高い南部馬の産地としても有名で、市街地を離れると牧場が点在している。

かつては狩猟や農耕、軍事や運搬など多方面で人々の生活を支えてきた馬だが、今では活躍の場がスポーツや趣味などに限られるようになってきている。そんな馬を健康や福祉の分野に利活用しているのが驥北会である。

ことの発端は平成4年。同会の理事長を務める中野渡利彦さんが、50歳を迎えたのを機に、新しいことがしたいと思ったのが始まりだ。それまで建設業を営み、忙しく過ごしてきたが、親しい友人ががんで亡くなったことなどもあり、以後の人生をもっと楽しみたいと思ったのだという。

「釣りもゴルフも散々やってきたし、残るは馬かなあ、と。それで知り合いのところに買いに行ったら、『1頭と言わず5頭持っていけ』と言われたんです。5頭もいたら乗馬クラブをやるしかないなと思ったわけです」と当時を振り返りながら笑う。

趣味で乗馬やトレッキングを楽しむ程度にと考えていた中野渡さんのところに5頭の馬がやってきたのは、まさに運命の采配だったのかもしれない。さっそく「十和田乗馬倶楽部」を立ち上げ、馬の可能

自然の中を馬の背に揺られながら散策していると、心身が解放されていくのを感じることができる